第4回演奏会
リレーション'70

Flute **野口 龍、永井 由比**　Violin **三瀬 俊吾**　Piano **大須賀 かおり**

2015. 3. 27(金)　**19:00** 開演

東京オペラシティ・リサイタルホール
TOKYO OPERA CITY RECITAL HALL

[協力] ジパングプロダクツ株式会社
[後援] 日本現代音楽協会・桐朋学園芸術短期大学同窓会「桐の音」

ご挨拶

本日は、「リレーション '70」第 4 回演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

1970 年から 1979 年まで活動した「室内楽 '70」（Fl. 野口 龍、Vn. 植木 三郎、Pf. 若杉 弘、後に松谷 翠）は、邦人作曲家へ計 20 作品を委嘱し、日本の現代音楽の礎を築きました。「リレーション '70」は、「室内楽 '70」の全委嘱作品の再演を目的に結成され、今回の演奏会で本シリーズは最終回を迎えます。入手困難な楽譜も、再演不可能に思われた作品も、たくさんの方の御助力を得て再演が実現致しました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

「室内楽 '70」の第 1 回演奏会から第 5 回演奏会まで、三善 晃先生の《オマージュ》 I から V が毎回初演されました。中でも、《オマージュ I》は「室内楽 '70」が演奏会の幕開けとして計 5 回演奏しており、「リレーション '70」の演奏会でも毎回演奏してきました。「室内楽 '70」が初演した全ての作品を再演するため、本日は《オマージュ》を I から V まで全て演奏致します。

I ～ V をまとめた《オマージュ》が 1976 年に完成し、「室内楽 '70」が録音しています。さらに、それを改訂した 1979 年版の《オマージュ》もありますが、それを「室内楽 '70」が演奏することはありませんでした。

また、「リレーション '70」も毎回、若手作曲家へ作品を委嘱してきましたが、今回は北爪 裕道氏にお願い致しました。北爪 道夫先生の作品とともに二代に亘り、一夕で演奏できますことを、とても楽しみにしております。

「室内楽 '70」の軌跡を辿った「リレーション '70」の活動が、未来へ受け継がれていくよう、メンバー一同願っております。最後までどうぞごゆっくりお楽しみくださいませ。

[リレーション '70 一同]
野口 龍　永井 由比　三瀬 俊吾　大須賀 かおり

Program

三善 晃：オマージュ I ～ V（※ 2）
オマージュ I（1970）
オマージュ II（1971）
オマージュ III（1972）
オマージュ IV（1974）
オマージュ V（1975）

浦田 健次郎：メロス II（1976）（※ 1）

北爪 裕道：三色オペレーション（委嘱初演）（※ 2）

休憩

高田 三郎：五つの民族旋律（1977）（※ 2）
I　北海荷方節（北海道）
II　かくま刈り（山形）
III　子守歌（青森）
IV　かんちょろりん節（福島）
V　じょんがら節（青森）

北爪 道夫：OASIS（1972）（※ 2）

佐藤 敏直：三奏者のための音楽（1977）（※ 1）

三善 晃：オマージュ アン クリスタル（1979）（※ 2）

Fl. 野口 龍（※ 1）、永井 由比（※ 2）　Vn. 三瀬 俊吾　Pf. 大須賀 かおり

このコンサートは、ジパングプロダクツ株式会社の協力のもと、ライブ録音を行います。

Program Note

三善 晃 オマージュⅠ～Ⅴ

「室内楽 '70」が結成されてから、三善 晃（1933-2013）は、彼らの演奏会のために、毎回一作ずつ《オマージュ》を書いた。奏者への友愛が表れた、この一連の《オマージュ》は、各楽器の特性が活かされつつも、三者が対話するように絡み合いながら展開される。ラヴェル（1875-1937）を彷彿させる《Ⅰ》に対し、《Ⅱ》以降は、より複雑な色合いを呈していくが、核となる音高や音程は同一であり、シリーズとしての統一感が意識されている。70年代の三善作品といえば、《レクイエム》(1971)や《オデコのこいつ》(1972)、《詩篇》(1979) など、生と死をテーマにした作品が多い。こうした作品と隣り合わせに書かれた《オマージュ》シリーズもまた、凝縮した厳しい響きをたずさえている。なお、本日は、1975年の「室内楽 '70 第5回演奏会」と同様に、《Ⅰ》から《Ⅴ》までが通奏される。
（文責：池原 舞）

三善 晃（1933-2013）
3歳の頃からピアノ、ソルフェージュ、作曲を学び、小学校に入った頃から作曲とヴァイオリンを習う。1951年東京大学文学部仏文科に入学。第22回日本音楽コンクール作曲部門第1位。1955年パリ音楽院に留学、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ・モンブランに師事。アンリ・デュティーユの影響も受ける。1957年帰国、東京大学に復学し1960年に卒業。作品は管弦楽、室内楽、歌曲などのほか、多くの合唱曲がある。1974年～95年まで桐朋学園大学学長を務める。1999年12月芸術院会員となり、2001年11月文化功労者に選ばれる。

浦田 健次郎 メロスⅡ

この作品は室内楽 '70（Fl. 野口 龍、Vn. 植木 三郎、Pf. 松谷 翠）からの委嘱により、1976年4月に作曲し同年5月に初演されたが、1977年2月に同じ演奏家により改訂初演され、今のかたちとなった。フルート、ヴァイオリン、ピアノは、歴史のなかで見事な音楽を体現し、また演奏技法もあらゆる技法が開発し尽されたとさえ思われる。これらの楽器からどのような音楽を引き出し、どのように楽器達をかかわり合わせるか、この作品を作曲する課題であった。

浦田 健次郎（1941-）
東京藝術大学音楽学部附属高等学校を経て、同大音楽学部器楽科（トロンボーン専攻）を卒業。同大作曲科を経て大学院修士課程修了。作曲を石桁 真礼生、丸田 昭三、末吉 保雄の各氏に師事する。現在、東京藝術大学名誉教授。主要作品。管弦楽曲〈交響曲〉〈アンティフォン〉室内楽曲〈トートロジイ〉歌曲〈誄歌〉その他。

北爪 裕道　三色オペレーション（委嘱初演）

この作品は、昨年作曲したサクソフォン、アコーディオンとピアノのための作品《Ondulation》を下敷きにしている。曲中には３種類のジェスチャー A,B,C が存在し、それぞれに音組織・リズム・律動などにおいて特徴づけられている。さらに各ジェスチャーには、「レギュラーな状態」と「イレギュラーな状態」が存在する。全体は３部から成る。第１部ではジェスチャー A が、しばしば C の干渉を受けながら、レギュラーな状態からイレギュラーな状態へと徐々に推移する。第２部で は B が、A と C の干渉を受けながら、そして第３部では C が、A と B の干渉を受けながらレギュラーからイレギュラーへ、といったように、概括的には３種類の ジェスチャーが立場を入れ替えながら各部において同じようなプロセスを踏む、というシンプルな構造にみることができる。A は、同一音上 に留まるジェスチャー。レギュラーな状態で静止または一定のパルスを刻み、イレギュラーな状態で不規則なパルスを刻む。B は全音階による音組織上で上下運 動を繰り返す、波のような音型。各パート、固定された周期でレギュラーな運動を続けるが、それらはしばしばイレギュラーに切断される。C は、完全４度の堆積から成る和音上を、スタッカートの 16 分音符が移動するもので、規則的な上行を繰り返すものが「レギュラー」、不規則に飛び散るように移動するものが「イレギュラー」である（冒頭第１小節のジェスチャーはそれに当たる）。

かねてより伝説的な存在として尊敬の念を抱いていた「室内楽 '70」とその活動にゆかりのあるこの企画にこのような形で関われたことは大変嬉しく光栄に思います。演奏者ならびに関係者の皆様に感謝申し上げます。

北爪 裕道（1987-）

東京芸術大学大学院修了後、文化庁新進芸術家海外研修制度により渡仏。現在、パリ国立高等音楽院在籍中。様々な編成による器楽／声楽作品、電子音楽／ミクスト作品などを手がけ、それらは東京とパリを中心に各地で演奏されている。数多くの名手たちや演奏団体とのコラボレーションによる、独自の技術開発・音楽的探求に基づく先進的かつ明解な作風は、国内外で高く評価されている。2013 年、アンサンブル室町からの委嘱作品が初演された公演は、佐治敬三賞を受賞した。また指揮者としてもこれまでに国内外数多くの作曲家のアンサンブル／オーケストラ作品の初演／演奏を手がけている。

高田 三郎　五つの民族旋律

私の子供は高校を出ると間もなく、ドイツの音大に入るためヨーロッパへ出発した。日本を体に感じさせておくため、かねがね私たちは、奈良のお水取りにも、歌舞伎にも、或いは文楽などにも一緒につれて行くようにしていたが、出発したあと、ピアノを専門にしている彼女のために、私は、日本の旋律によるピアノ曲を書き送りつづけることを思い立った。十年近くもたつ間にそれはいくらもはかどらなかった。〆切のない作曲はなかなか書けないものである。数少い小曲を書いている間、文楽のチャリ場で声をあげて笑った、隣の席の私の子供の声が私の筆をすすめさせた。こうして書いている間に、もし旋律楽器があったら、この曲はどんな形になるだろうかという問いが何度も心に浮んだ。こうした時、私は室内楽 '70 から依嘱をうけたので、思い切ってこれをトリオにしてみることとした。この五曲の内には、この時期以後にとりかかったものもあるが、このふたつの演奏の型、即ちピアノ・ソロとトリオにはそれぞれの特徴があり、それぞれ異った書法と出来上りがあることを勉強させてもらうことになった。ピアノ・ソロにはまさにそれ自身のよさがあるが、トリオにはさまざまな音色があり、特にこのトリオの編成楽器、フルートとヴァイオリンは日本的ヘテロフォニーの面白さにはなくてならぬ組み合わせであることを発見して喜んだ。動機が上記の如くであるので私は、もとの旋律をゆがめることは出来るだけ避けた。しかし、民族旋律に対するこの姿勢は、私本来のもので、もし最初からトリオのために書き始めたとしても変りはなかったと思っている。
（1977 年 6 月 29 日・増上寺ホール・室内楽 '70 第 7 回演奏会、プログラムより）

高田 三郎（1913-2000）
東京音楽学校（現在の東京藝術大学）作曲科を経て、同大学研究科作曲部、同大学聴講科指揮部を修了。作曲を信時 潔（1887-1965）、マンフレート・グルリット（1890-1972）らに師事。1948 年に平尾 貴四男（1907-53）らと共に、西洋と日本両面の文化遺産を尊重するという立場で、「地人会」を創設した。《水のいのち》（1964）に代表されるような合唱曲を多数書き、日本の合唱界を支えた他、1953 年にカトリックの洗礼を受けてからは、約 220 曲にも及ぶ日本語の「典礼聖歌」の作曲にその後半生を捧げた。（文責：池原 舞）

北爪 道夫　OASIS

OASIS は、砂漠の泉。曲名は、古典的なとりあわせの中に、あえて、新しい OASIS を求める気持ちから名付けた。曲は、確定された音高による、数種類に限られた音の運動の自由な交代により進められる。すべての時間配分は秒数で規定しているが、実際は、より衝動的な切り込み合いとなることを期待している。尚、練習中、多くの演奏上の示唆をお与えくださった、植木 三郎氏、野口 龍氏に厚く感謝いたします。

上記は初演時（1972 年 12 月 21 日ヤクルト・ホールで開催された「室内楽 '70」第 3 回演奏会）のプログラム・ノートです。ピアノは私が担当、楽しさと恐怖が半ばする中お二人に優しく支えて頂きこの上ない経験をしました。今日は、若く素晴らしい方々に繋いで頂くことが出来て、実に感慨無量です！

北爪 道夫（1948-）
東京藝術大学及び同大学院修了。77 ～ 85 年現代音楽集団アンサンブル・ヴァンドリアンで企画・作曲・指揮を担当し内外の現代作品紹介に努めた。79 年文化庁派遣芸術家として渡仏。以降、様々な演奏家や団体からの委嘱により多くの作品を作曲、内外で度々演奏され国際的に高い評価を得ている。中島健蔵音楽賞 (83 年、04 年)、ユネスコ国際作曲家審議会グランプリ (95 年)、尾高賞 (94 年、01 年)、吹奏楽アカデミー賞 (13 年) 等受賞。東京音楽大学客員教授、愛知県立芸術大学名誉教授。

佐藤 敏直　三奏者のための音楽

野口さんのすばらしさに本当の意味で触れることができたのは、五年ほど前に、私の作品で一緒にアンサンブルをやったときである。とりわけ後半の、即興演奏における、素材の料理には舌をまいた。そして、笛の言葉が、あんなに多彩になり得るものであることを、はじめて知った。植木さんの奥行きの深さは、輝きと、非常に秘やかな中間色のフィルターを通したときの、あの強烈な渋さに因るものである、と確信している。ほとばしりでる感情に、ひとひねり味つけがある。松谷さんは、打鍵の速度が大きい。手のおりた瞬間に、内的な燃焼のすべてを映すように見受けられる。多分、ピアノをよく知っているにちがいない。「バンドリ」「山唄」にみられるであろうところの、いわば、中心の旋律の自己回転に時間的空間を委ねる、という形をおさえて、私としては珍しく、断片的なフレーズを意識したが、これは、三人の内的な生成の結合を考えた結果である。つまり、優れた奏者たちへの敬意に他ならないのである。―作曲 1977 年 2 月～ 5 月・単一楽章・約 10 分―。（1977 年 6 月 29 日・増上寺ホール・室内楽 '70 第 7 回演奏会、プログラムより）

佐藤 敏直（1936-2002）

慶應義塾大学工学部電気工学科を卒業。清瀬 保二（1900-81）に師事。日本的な感性にあふれた色彩豊かな作風が特徴。代表作品は、現代邦楽作品の《ディヴェルティメント》（1969）。日本音楽コンクール作曲部門の審査員や、日本現代音楽協会（JSCM）の委員長（1993-98）を歴任するなど、現代音楽の演奏現場において活躍しただけでなく、カワイ音楽教室の教材として子供のためのピアノ曲集を多数書くなど、後進の育成にも貢献した。（文責：池原 舞）

三善 晃　オマージュ アン クリスタル

７０年代の前半に５曲のオマージュを捧げさせていただいた。
７０という時代が過ぎようとしているいま、それを名乗った３人に対する私の気持はさらに深い尊敬（オマージュ）である。彼らによって７０年代がどれほど実りのある時代となったか、測りしれないし、それはまた、８０年代の広大なホリゾントを展望させるものでもあった。その原野に、彼らの活躍をひきつづき希うのはわたしだけではあるまい。

ひとつの、かけがえのないものの結晶（クリスタル）と、その清冽（クリスタル）な余韻を銘すべく、曲名とした。曲中の自然倍音（ハーモニックス）はオマージュⅠ～Ⅴのそれと呼応して、わたくしのなかに、彼らとともに過すことのできた１０年の抛物線を描く。（1979 年 11 月 12 日・草月ホール・室内楽 '70 第 10 回演奏会、プログラムより）

Member's Profile

野口 龍 のぐち りゅう (フルート)

桐朋学園短期大学音楽科在学中に ABC 交響楽団入団。後に日本フィルハーモニー交響楽団入団。読売日本交響楽団入団。1970 年「室内楽 '70」結成。読売日本交響楽団を退団以後、独奏や室内楽に活発な活動を続けている。ことに現代音楽の分野において活躍は目覚しく、その実力は国際的レベルと評価されている。近年では、2002 年より 2006 年まで《日本の室内楽・日本のフルート作品》2 本立てのシリーズを企画、制作。特にシリーズ最後のリサイタルは、深い感銘を与えた演奏会として、各方面から絶賛を呼んだ。現在、桐朋学園芸術短期大学特別招聘教授、上野学園大学客員教授。「東京フルートアンサンブル・アカデミー」メンバー。2002 年第 11 回朝日現代音楽賞受賞。

永井 由比 ながい ゆい (フルート)

桐朋学園大学短期大学部卒業、同専攻科、研究生修了。 現代音楽コンクール競楽、東京音楽コンクール等に入賞。 これまでに、ISCM 国際現代音楽祭、東京室内歌劇場でのロシア公演、サントリーサマーフェスティバルでの出演など現代音楽分野で活発に活動する他、子供たちへの音楽ワークショップやアウトリーチ活動などもライフワークとしており、これまでに、学校、養護施設などでのアウトリーチ、子供対象のワークショップの公演は 400 回を越えている。(財) 地域創造公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。 桐朋学園芸術短期大学常勤講師。ムラマツフルートレッスンセンター講師。

三瀬 俊吾 みせ しゅんご (ヴァイオリン)

東京音楽大学卒業後、桐朋学園大学院大学修了。篠崎 功子、岡山 潔、藤原 浜雄の各氏に師事。第 1 回横浜国際音楽コンクール弦楽器一般部門第 1 位。同コンクールより奨学金を得、パリ・エコール・ノルマル音楽院へ留学。同音楽院にて、ドゥヴィ・エルリ、原田 幸一郎の両氏に師事し、マスタークラスや音楽院内での演奏会などに出演。第 6 級研修課程及び室内楽のディプロムを取得。定期的に千々岩 英一氏の指導も受け、パリでソロや室内楽、新作の演奏活動も行う。日本では「第 1 回室内楽 - ＯＴＯ - 三瀬俊吾のヴァイオリンとともに」で 7 作品の新作を演奏。2010 年帰国。各地でリサイタルを行う他、2010 年に世界中の現代作品を紹介している「mmm...」を結成。東日本大震災義援音楽配信プロジェクト「ヒバリ」では国内外から 100 作品を録音、ネット配信した。2011 年には現代音楽グループ「淡座」を結成し、現代音楽と古典落語で旗揚げ公演を行った。現在はソロや室内楽やオーケストラなど幅広く活動中。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。

大須賀 かおり おおすが かおり (ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。日本室内楽コンクール第 2 位。第 5 回現代音楽演奏コンクール競楽 V 優勝、第 12 回朝日現代音楽賞受賞、2003 年度青山バロックザール賞受賞。現代音楽アンサンブル「mmm...」では世界から 100 人の現代音楽作品を配信。知られざる歌や子供のための歌を紹介する「KOHAKU」・室内楽 '70 を再演する「リレーション '70"」等の活動の他、ソロリサイタル、北京国家交響楽団との共演、韓国大邸国際音楽祭等多数出演、また国内外でのレクチャーコンサート等幅広く意欲的な活動を展開。世界、日本初演数は 250 曲を超える。これまでに 2 枚のアルバム、楽譜集をリリース。日仏現代音楽協会、日本・フィンランド新音楽協会会員。桐朋学園芸術短期大学、東京成徳大学・同短期大学、弥栄高校芸術科非常勤講師。

[Website] http://kaoriohsuga.com/

リレーション'70 演奏会記録

第1回演奏会

2012年12月18日（火）
19時開演
東京オペラシティ
リサイタルホール

三善 晃：オマージュⅠ（1970）（Fl. 野口 龍）
別宮 貞雄：朝の歌（1975/76）（Fl. 野口 龍）
平吉 毅州：三人の奏者のための即興曲（1970）（Fl. 永井 由比）
山根 明季子：柘榴色の曖昧な欠片（委嘱初演）（Fl. 永井 由比）
三枝 成彰：３＋α→４０４（初演）（Fl. 永井 由比）
林 光：WONDERLAND　1（1972）（Fl. 永井 由比）
松村 禎三：アプサラスの庭（1971/75）（Fl. 野口 龍）
Vn. 三瀬 俊吾　Pf. 大須賀 かおり

第2回演奏会

2013年9月8日（日）
14時開演
東京オペラシティ
リサイタルホール

三善 晃：オマージュⅠ（1970）（Fl. 野口 龍）
末吉 保雄：コレスポンダンスⅢ・Ⅳ (1979/80) (Fl. 野口 龍)
池辺 晋一郎：トリヴァランスⅠ（1971）（Fl. 永井 由比）
江原 大介：ハウリング（委嘱初演）（Fl. 永井 由比）
一柳 慧：トライクローム（1975）（Fl. 永井 由比 /Tam-tam. 野口 龍）
肥後 一郎：フルートとヴァイオリンとピアノのためのテルツェット（1978）（Fl. 永井 由比）
小倉 朗：フリュート・ヴァイオリン・ピアノのためのコンポジション（1978）（Fl. 野口 龍）
Vn. 三瀬 俊吾　Pf. 大須賀 かおり

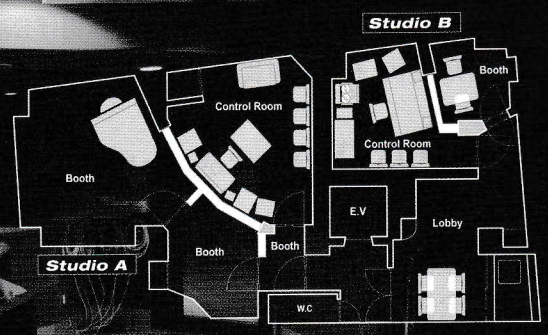
第3回演奏会

2014年6月27日（金）
19時開演
東京オペラシティ
リサイタルホール

三善 晃：オマージュⅠ（1970）（Fl. 野口 龍）
廣瀬 量平：フルートとヴァイオリンとピアノのためのピエタ（1979）（Fl. 野口 龍）
柴田 南雄:トリムルティ（1974）（Fl. 永井 由比 / Pf.Cemb.Per. 大須賀 かおり / Electronics. 有馬 純寿）
入野 義朗：HRSのためのトリオ（1970）（Fl. 野口 龍）
渡辺 俊哉：流跡線（委嘱初演）（Fl. 永井 由比）
八村 義夫：エリキサ（1974）（Fl. 永井 由比）
野田 暉行：バラード（1978）（Fl. 永井 由比）
Vn. 三瀬 俊吾　Pf. 大須賀 かおり

GENONSHA
Studio 246
RECORDING STUDIO, AOYAMA, GAIEN-MAE

バンドのレコーディング
リズムセクションの一斉録り
各種ソロ楽器のダビング
映像のナレーションダビング
副音声の MA 作業
各種ナレーション収録
etc...



Studio A (20m² + 7m² + 2m²)
Basic Price
1hr ￥12,000
Engineer fee (1hr) ￥4,000
Package Price
3hr package (engineer 無し) ￥30,000
3hr package (engineer 付き) ￥40,000
10hr package (Lockout) (engineer 無し) ￥80,000
10hr package (Lockout) (engineer 付き) ￥100,000

Studio B (4m²)
Basic Price
1hr ￥8,000
Engineer fee (1hr) ￥4,000
Package Price
3hr package (engineer 無し) ￥20,000
3hr package (engineer 付き) ￥30,000

www.genonsha.co.jp